

発達に即応した教育課程の編成

—「動き」に視点を当てた生活単元学習の展開—
(生活単元学習指導計画)



昭和58年2月

鹿児島大学教育学部附属養護学校

は し が き

学校長 土 屋 正 幸

本校は、昭和55年4月、附属小・中学校の特殊学級を統合して開校した経緯から、初年度は何より教育課程の編成という必要に迫られた。従って、学校教育法施行規則及び養護学校学習指導要領に基づき、更に児童・生徒の能力・特性等を踏まえ「発達に即応する教育課程の編成」を目指し、独自の教育課程作りの実践と研究に努めた。一応編成した教育課程の修正すべき点や研究推進上の問題点を掘り起こす中から、学習内容・指導方法の改善充実の課題が浮かんできた。それは、児童・生徒に身近さを覚えさせる内容を設定し、学習意欲を喚起しながら能動的に活動させるかということであった。所謂如何にして対象者の興味・関心を高く、あるいは深くゆさぶって必要なことを学ばせ、身につけさせるかということである。

このような立場から、2年次から教育課程の中心的な指導形態である生活単元学習に焦点をあてることにし、——「動き」を生かした生活単元学習の展開——をテーマに取り組みを始めた。この場合「動き」を心情行動（内面的）と身体行動（外面的）の両面をもつ全体的人間としての観点からとらえ、自発性のある合目的的活発な活動のさせ方に留意して実践してきた結果を記したのが、この集録である。

養護学校の義務制に伴い、教育理念・教育内容・教育方法等派生した課題の解決に努力が払われ、教育の効果が具現されていることは喜ばしいことである。ただ、障害児教育の中でも精神遅滞児の教育は対象者層が複雑であるだけに、実践結果を客観化すること科学化することは、なかなか困難であることを感ずる。然し、わたしたちは、困難であればある程、人間尊重の教育の基本理念を見つめ、あずかる児童・生徒ひとりひとりに人間として生きる力を育成することに力を傾注して行かねばならない使命感を覚える。

ここに開校3年目、初めて研究を公開するに当って、参加していただいた会員各位の卒直なご批正とご教示を仰ぐことができれば、望外の幸せである。

末尾ながら、研究を推進するにあたり、たえず懇切なご指導をいただいた教育学部・県教育委員会関係の先生方に深甚の謝意を表する次第である。

昭和58年2月18日

目 次

1. 研究の立場	2
(1) 大テーマ設定の立場	2
① 教育に対する教師の構え	2
② 教育課程編成の必要性	2
(2) 研究のあゆみ	3
(3) 本年度の研究内容与方法	4
① 基本的な立場	4
② 研究内容	4
③ 研究組織	4
④ 研究計画	5
2. 研究の実際	6
(1) 実態について	6
① 基本的立場	6
② 調査項目および内容・方法	6
③ 児童・生徒の概要と調査	6
④ ま と め	14
(2) 理論研究のあゆみ	15
① 昭和56年度の研究	15
② 本年度の研究	16
(3) 授業研究	19
① 研究授業の進め方	19
② 一人ひとりの動きがわかる指導案	20
(4) 各学部の実践	
① 小学部	23
② 中学部	49
③ 高学部	71
3. 今後の課題	102
主な参考文献	102
生活単元学習指導計画	104
あとがき	182